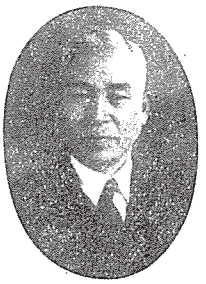
關西大學學報

大正十一年六月十五日創刊
昭和十五年十二月廿八日印刷
昭和十六年一月一日發行

編輯兼發行人　酒井敬民
大阪市北區堂島上三丁目十五番地
印刷所　谷口印刷所
大阪市東淀川區長柄中通二丁目十二番地
發行所　關西大學學報局

産業報國精神（要約）

日本ペイント會社々長
小畑源之助



産報運動の精神

私はこの度文部省の御依頼によりまして本學に罷り出まして産業報國精神に就いて暫くの間お話を致す光榮を有する次第であります。

産業報國精神といふ題を掲げて、文部省が全國の專門學校、大學で我々の如き長く産業界で働いて來た體驗を有つものを動員して、若い人々に話をさすといふことを考へました所以は、昭和十二年以來の曠古の大業である現在の事變を、我が國に惹き起したこの最初の目的を達成するには、國内にその一員たりともその和に逆ふものがあつてはいけない、況んや國防國家を建設する以上、最も大切なものは産業であり、この産業人が從來の如く動々もすればその間に間隙を生じて自己の都合のために主張を爭ふといふやうなことがあつては大變である、なほ又平和克復後のこれまでの世界各國の戰爭の後を見ますと、必ず擾亂を來してをることは、産業界に於ける勞働問題であり、それに具へる用意はどうしても今日からやつておかねばならないといふことで、一昨年その端緒を開き産業報國の運動の出發にまで相談になりました。政府當局及び、こゝの學長先生も御關係になつてをります協調會の人々と幾度も議を重ねて、昨年の四月頃に漸くその形を成して、爾來全國にその運動が果實を結びつゝある形にあるのであります。最近に於て、政府がこれを取り擧げて、單なる工業方面の運動でなくして、商業にも海運にも一般のものにこれを及ぼして、國がその胴元を束ねて全國の各府縣に命じて悉くの職別産業報國會を作つて、この運動を充實せしめるといふことになつたのであります。本月の六日に厚生省の參與會議といふものがありました、この會に草案を掛けてその翌日非常に大規模の準備委員會を開き、その後特別委員會の議を經て去る九日に綱領が決定され、去る二十三日に大日本産業報國會の大規模なものが形として完成することにまで進んで參つたのであります。これと前後しまして本月八日の閣議に於て、勤勞新體制なるものが結成されました。この勤勞新體制に現はれてをる事柄とこの産業報國會の綱領及び理念並にその構成等も裏と表をなしてをるもので、これが我が國の國策として、今後推進されるべき筈になつてをるのであります。

かういふ風な經過を踏んでゐるのでありますが、然らばどんな處を狙つてをるかといふと我が國體の本義に基いて、日本獨特の産業といふものを確立し、産業人全部が産業は國家の機關であるといふことをよく承知して、國家に奉仕するといふ精神で産業に從事する即ち産業を通じて天業を翼賛し奉るといふことを全産業人に把握せしむるといふことでありまして、この産業の目的は國家にあるといふことを、全産業人に確認せしむる運動であります。

産業の目的が自由經濟時代、資本主義經濟時代に於きましては、個人の利益のためであり、個人がこれによつてその慾望を充たして、個人の富は國家の富であるといふ理論から行はれて來てをつたものが、これを引くり返して、産業は國家機關であり我々が國家に奉仕するのは産業に從事してこの産業を盛り

第一八五號要目

産業報國精神……小畑源之助…（一）
二つの亞米利加研究書に寄す…來島志朗…（五）
學内報……（七）
校友會報……（八）
戰線だより……（九）
會員消息……（一六）

立てゝ、産業を通じて然して國家に奉仕するのが本道であるといふことを總ての人々に確認せしむるのであります。産業報國精神は今申しましたことで、實は盡きるのであります。（中略）

産報運動の發生

産業報國運動なるものが何のためこゝに興つて來たかといふ會の歴史を話して見ることが、一番諸君の感興を引き又諸君の記憶に存するのではないかとこう思ふのであります。

産業報國精神なるものは故なくして興つたものではないのであります。我が國には産業の經營上に於て長い歴史を持つてをり、その間の諸弊がこゝに實現して來て、さうして高らかに産業報國を唱へなければならないやうになつて參つた道行きがあります。これは我が國が三百年以來鎖國政策をとつて、明治維新に至り始めて西洋各國の文化を眺めて見た時、何を見ても驚くべきもの呆れるもの許りであつて、これでは仕方がないからといふので、明治の政治が展開して西洋の文明を一切こゝに採り入れて參つたのであります、さうして自由主義、資本主義なるものが日本の經濟界に採り入れられて、それが非常に旺盛なる花を開いて、我が國が經濟上に於て押しも押されもせぬ一つの大國の有樣を成したのであります。さういふ狀態が長く續いて來てをる間に、所謂西洋崇拜の氣分があらゆる部門に濃厚になつて來て、西洋のことを謂へば良きも悪きも悉くこれを採り入れて、白人の云つてをることは、一切眞理であるといふやうな誤りさへも考へるやうになつて來たのであります。さうして資本主義が非常に旺んになつて來た結果としてその本元であるヨーロッパに於ても第一次歐洲戰亂後に反動が參つて、これに對する社會主義なる思想が擡頭して參り、幾多の混亂を呈して來ました。我が國に於ても、その頃から西洋の社會主義的な思想が入つて參り、産業界に於ても勞働組合なるものが輸入されて來て、勞働ブローカー、又は或方面の學者、論説家のやうな人が先に立つて、この誤りたる思想を不動の眞理の如く考へ、遂には勞働者の天下になり、グズ〳〵して乘り遲れたら大變だといふ態度をとり、今日の新體制に向つて、さういふやうな誤りを傳へてをると同樣な混亂が來たのでありますが、政府はその勢に迎合して、昭和四年、時の內閣が我が國にも勞働組合法を制定して勞働者の地位を確保し一つの組織を與へるやうにさせなければならないといふことを云ひ出したのでありまして、之に對し我が國の傳統及び産業組織、家族制度のやうな事から考へて見まして、日本の良風美俗を破壞するものであるといふことから敢然として爭つたのであります。遂に昭和六年の四月、議會に於て原案は破れ、勞働組合法なるものが成立せずに濟んだのであります。そのことは今日の重大な國家危救の目的に當つて、いろ〳〵産業報國運動がものになつて來たといふ因を成すものであります。唯目の前に閃いてをる事情を捉へて、これを千古の眞理の如く考へ、これが世界各國を風靡するものと速斷することは餘程謹まなければなりません

處が我が國はさういふ風な譯で、勞働運動の過激なものも途中に於て止められることになり、且つ我が國獨特の長所である中小工業なるものは、多くの家庭での家業といふものと關聯して、非常に合理的な我が國獨特の機構を持ち良品を安價に製出した。これの中心である大阪に於ては、大阪の雜貨が年々數億のものが世界各國、それこそ地球上至る地に分布されて行き、歐米先進國の從來有つてをつた市場は年々とられて行くといふ狀態が長く續いたものですから、長くそのまゝに日本のやり口を傍觀してをることを許さない、やはり勞働運動者と感を通じて日本をあちらでやつてをるやうな社會組織の中に取入れていつて、國際勞働會議などで日本の勞働組織が非常に間違つた、人間を無視したものになつてをる等いろ〳〵非を擧げ、勞働組合を整備して、そうして日本の製産品を安くあがらないやうにと努力を續けたのであります。我が政府も國際勞働會議なるものに年々勞働者代表、資本家代表を送りお附合ひをしてをつたのでありますが、この間勞働會議に於て取上げた問題の如きは、悉く日本の産業に悪しき影響を與へるものゝみで、それが我國の産業の邪魔をしつゝあつたことが續いたのであります。これが後に申します樣な一大轉換期となりまして今日を招來したのであります。

昭和に入つて既に二、三年頃から後は、前申す如く日本は段々貿易上に優勢を占めるやうになり、英國の綿布の本家であるマンチエスターに日本から綿布が行くといつたやうなことになつて、各國はこれに對して關税の引上げ、輸入禁止等あらゆる方法を以て日本品の海外に出ることを邪魔して來たのでありますが、この事によつて各國が利害の上から一つになつて日本を攻めやうとして、いろ〳〵の方法で日本の經濟上の進展を防いで來たのであります。

事變後の變革と産報

支那に向つても、やはりこれらの國々が——英佛の如きものが尻押しをして、排日の運動を起させてをる日本はこれまでに各國から八方攻めになつてをり、何處に行つても日本に好い顏をしてくれるやうなものはないやうになつて居つた處が、手近な支那といふものを煽動して現實に日本に對して武力を加へ、無理を强いるといふことのために勃發しましたのが滿洲事變で滿洲事變は突如として起つたものでなく、起るべき長ひ間の累積したものがあつてこゝに勃發したのであり

ます。併し滿洲事變なるものは、我が帝國の歴史に嘗つてない一大轉換をしたのでありまして、これ以來支那事變がありますが、これによつて我國は全ての政策全ての機構に大變革を加へなければならないやうに押し進んで來たのであります。滿洲事變の後にも益々各國が日本に向つて壓迫を加へたので、當時の國際聯盟を敢然として脱退したのであります。之と前後して從來永く國際主義でなければ文明國といふものはやつて行けないと思つたのを、これを打捨てゝ國家主義に乗り換へました。歐米依存といふものを清算して、日本は日本だけで行かうといふ氣分になつて來た。そうなつて夢覺めて眺めて見ると、從來歐米と附合つて來た事柄は悉く瞞まされてをつたのであります。その國々の利益のため我が國が犠牲にされんとしてをつたものであるといふことが分つて來た、勞働運動にしてもやはりそのことが分つて參りました、これまで眞理の如く考へてをつたものは決して眞理でなかつた、彼等のためにした處のものであつて日本の勞資の間を隔絶させ、又勞働者の勤務時間その他を持出して、人道問題とか何とかいふやうな美名の下に日本人を働かせないやうに、日本から生産したものゝ價を高くするやうに着目してをつたのであります。さういふ事がハッキリと分つた。

さうすると日本は日本だけで立つて行くより方法がないといふので、一番初めに考へられたことは、日本には何があるか、何か捉へるものがないかといふことを考へたと思ふのであります、處が大いにあるのであります。日本には日本精神がある。日本には歴史あつて以後二千六百年間蓄積した非常に力強いものがあり、國家を經營して行く上の道筋といふものをもつて記紀等の神典に教へられてをつたといふ事をボツ〳〵と探し出して來た。滿洲事變の當時はそこまで進んで來た。日本精神といふ旗を掲げてさうしてこれで行かうといふことになりました。內容の檢討の出來てゐないものを持つて來たといふのが事實であります。

滿洲事變以後世界の壓迫といふものは益々日本に向つて強くなり、一方我が國に日支事變が勃發したのであります。日支事變がやゝ長期戰にならんとした傾向を見た時、近衞內閣が出來、林銑十郎內閣の時にはハッキリしなかつた祭政一致といふものを以て政策を行ふといふことになりました。祭政一致の後を追つて、日本精神といふものを中心にしてその發揚を唱導し、それを振興することに努めて參つたのであります。さうして第二次近衞內閣に及びまして所謂新體制運動といふものが起つて來て今日に及んで居るのであります

國家と産業の地位

そこで根本問題の産業なるものは、國家を構成する上にどういふ位置を成してをるか、といふことを諸君と共によく吟味して見たいと思ひます。それによつて産業報國精神も分れば、産業に從事するものゝ誇りも分ります。

私の考へる處では、産業は國家經營の根本であり、産業なかりせば國家といふものゝ經營は出來ない、かういふことを確信して居るのであります。産業は物を産む業であり、これに附隨して、これを配給するもの、或は金融機關、或は運送機關といふさういふ機關もあり、兎に角産業あつて初めて租稅が上つて來る、産業を取去つたならば租稅の根源がなくなる、國家を經營する上に租稅が基本である以上、産業がなくなれば、どこからも出て來ないといふ事になる。又産業は國民生活の基であり、産業によつて國民の衣食住、文化の生活は勿論、産業を除いたならば國民は素裸で居なければならない。又産業は我が國の如く國內で以て總てのものを得ることの出來ない國柄に於ては、國家を經營をして行く上に於て一日も缺くべからざる處の輸入の基をなしてをるのであります。産業の發展によつて海外の現狀に適合したものを作つて、これを出してゐる現在の紡績工業の如きはこれで、日本に一本の棉もないのに、これを遠國から買つて來て、さうして日本でそれを紡いで遠國に又出してをる。これだけで日本の輕工業中の第一位を占めてをる大機業が成り立つてをる。産業はそこにものが産まれなくても、物を加工しそれによつて無價値なるものを價値あらしめる。價値なき處に價値を産むといふのが産業であります。我が國として産業がなかつたならば、翌日から戰爭を止めなければならない。産業に於て兵器彈藥を作り、各種の醫療、食料等を皆整へて、そうして百萬の兵が大陸に働いて國家のために獻身的の働きをして貰ふことが出來るのであります、如何に百萬の兵を送つても、産業が後ろで働かなければ何も出來ない。況んや今日大きな旗印を掲げてをる高度國防國家を建設するには何が基かといふに、産業が基であります。産業はそれ程大事なものであつて、産業を取り去れば國家の運營は出來ない、これだけ大切なものであります。この事さへ確定すれば後は皆解決がつくだらうと思ひます。

現在の政治の上にも種々誤つたことがあります。それは産業といふものをもう一度見直さなければならない。産業といふものを見るに、産業人の一部が私慾を追求してをるといふ姿を見て産業といふものが無用の如く何か政治を行はんとしてゐる。産業なるものは國家的であり、政府もこれを盛り立てゝ一番大切なものとして産業を鞏固にし發展して行くやうな政策を採らなければならないのであつて、そこに誤があるといふことを採り上げて喧しく主張してをるのであります。

又他の産業人も産業なるものがそれ程大切なものであるといふことを考へてゐない。一つ儲けて見やう、儲かつたら藏を建てやう、大きな家を作らう、或は人

に見せびらかそうといふ考へ方は、これはその人が悪いのでなく資本主義、自由主義の經營時代にはこれによつて國家が伸びて來た、これはよかつたけれども度を過すといふとその結果近頃の言葉でいふ利潤の追及といふ弊に陷つて參る。この頃政治は産業に先立たなければならないといふことを頻りにいつて居る。經濟を政治が壓迫し、唯空理空論で經濟をひきづつて行くといふことは産業を萎靡せしめるものである。どちらも車の兩輪の如き動きをして行くものであると思ふのであります。兎に角かういふ風に産業なるものは大變なものであるといふことを考へた時、諸君は産業に從事せられたとして、その心掛けがどうであるか、自分の月給を取るため産業を自由にするといふ風に考へるべきでない。國家に對してそれだけ大切なものであるとするならば、どうしても産業第一主義、産業の隆盛といふことに努力し、協力するといふことに目標を置かなければならない事になる。産業は國家に對してどれだけの必要性を持つて居るか、價値を持つてゐるかといふことも自然に分つて來ると思ひます。

我が國體と産業

我が國の國體から申しても産業なるものは、天孫降臨の御時より非常に大きなものとしてお扱ひになつてをります、三大御神勅の中の第二の御神勅に「齋鏡授穗」の御神勅といふものがあります。御承知の如く、御鏡と稻穗をお授けになつた。これは御鏡は精神であり、稻穗は物質である。精神のみでは人類の生存といふものゝ向上といふものは出來ないと思ふのであります。伊勢に天照大神宮と並べてお祀りになつてをられる處の懸受大神宮もやはりさういふ受持の神樣でおありになるといふことを考へましても、非常に我が國は産業なるものを國土經營の大きな部分としてお取定めになつてをられるのであります。産業は　天皇の御業である、それを我々がお預りして傷けないやうにしよう、出來るだけ大きくし、出來るだけ強くして、そして國家經營の一部の役目を果さして頂く、所謂宏謨翼賛さして頂くといふことになるのであります。

こういふ國柄でありますから元々對立といふことがあらう筈がない。やはり事業一家といふ言葉を今度用ひてをりますが、一國は一家である如く共々その經營者に參加して行く、そうして企業をよくして行くといふのであります。うまいことを云つて資本主義が勝手なことをする、使用人を虐待するといふ事例が多々あつたのであります。これが今度はだん〳〵法制化されて今度の大藏省の經理令等でハッキリ決つてしまつた

産業經營の衝に立つもの――諸君も産業經營の衝に立つ人々も多いと思ひます。將來經營の衝に立つものは、今申しましたやうな考へから言ひますといふと、非常に大きな責任が國家的に課せられてをるのでありまして、これはこの間の勞働と新體制の中にもハッキリと內閣から發表したやうに、經營者が企業の支配權を以て經營者指導の下に産業が活動して行くやうにハッキリ決まつた。産業は前申す如く非常に大切なものであるとすれば産業に自ら從事せざる人と雖も、産業なるものは國家と結び附いてをる處の大きな役目をよく理解して置くといふことが大變必要かと思ふのであります。

産業の構成要員

もう一つ分り切つたことでありますが、理解を求めて置きたいのは、産業といふものはどういふ人々によつて構成されてゐるか、これは前から永い間考へられて居りましたのは、この産業は勞資二つで出來てをる、資本家と勞働者で出來てをるといふ舶來の解釋がありました。そこに根本の誤りがあります、産業は資本と勞働とで成り立つものであるが、その上に最も大きなものは經營である。この經營なるものはその中に勘定に入れてをかなければならなかつた。昨年の四月まで産業報告會の綱領が決定する時に永い間議論のありました經營なるものが三分の一のものである、經營は三つの中の一つの資格があるといふことが漸く加へられることになつたのであります。今回勞働新體制によつて前申す如く、經營者が指導するといふ處までもう少し上つて來たのであります。經營者なるものが中心になるべきもので經營者なるものが資本にも勞働にも適當の指令を與へ、そうして國家の産業なるものが推進して行くものでなければならないのであります。かういふ風に諸君と共に經營者は一つの誇りを持つて一つの見識を以て今後國家の一員として活動すれば、自分の行ひとそれに副はなければならない。我々が竿を斷つたならば國家は建ち行かないといふ見識を以て互に産業に從事したい。かやうに思ふのであります。

然しこの産業人が産業に從事してをり、そうしてこの腕、技術といふものがその成否の鍵を握つてをるのでありますが、これ以上大切なものは精神であります。如何なる時代にも精神が國民の士氣を差配する、如何なる時代にも青年が時代を差配する、青年の士氣によつて國家の運命が開けもし、又その反對の結果を見るといふことは歷史が證明して居るのであります。現代の青年にこれだけの氣魄がありや否やといふことになりますと若干そこに疑ひがあるのであります。我が帝國の現狀を吟味し、如何なる仕事を背負つてもこれに萬全の努力を捧げて如何にも今日の非常時の青年らしい行動を執つてやることが必要だと思ひます。

一つの工場に入つても、一つの商店に入つても全然自己といふものを沒却してさうして先刻來長く申しました如く、産業報國精神を以て立つ人の行動といふものは非常に目立つ他のものを引き附けて行くだけの力があるのであります。でありますから諸君はこの重大な時期に、曠古の重大時期に生を享け、且つかういふ時に高等教育を受け、學窓を出られるとしたならば、尋常一樣の心構へでは相濟まぬ、この帝國の難關を突破して行く推進力となるものは我等だらうといふ旺んな青年らしい氣持を持ち、來年の卒業期に學窓を巣立つて行かれるやうに今から一つ用意して頂きたいと思ふのであります。（下略）

――文責在記者――

二の亞米利加研究書に寄す

松下正壽著　〝米國戰爭權論〟
デ・バーキンス著　豊田義道譯　〝モンロー主義〟

來島志朗

「小さな窓から外は眞暗だ、僅かな書物が或一人を取卷いて居る。其中には長い難儀な旅行から戻つて來て、今は靜かに休息をして居るのだと言つたやうな顏付も見える。諸君の感想は、成程諸君の時代であり、又氣質であり境遇であつたかも知れぬ。新たに出かけて行く者を再び案内して貰ひたいと言ふのでない。少なくとも何が諸君を誘ひ又は引留めてさういふ根氣のよい旅人にしてしまつたかを話して之れ、と尋ねる言葉も亦獨り言であつた。わかるものかといふのか、忘れたといふのか、書物はまじ〳〵と默つて私を見て居る。外は全く風が無く又もう騷ぐ木の葉もない、今夜もうんと霜が降るだろう。」

柳田さんは〝我が燈火〟（温古知新一九二頁）の中でこんな事を言はれたことがある。かやうに心氣を鎭めて讀書を心から樂しむ柳田さんの心境を其儘現在に生かす心構へが轉換期に生きる吾々にも必要である。宜なるかな我々の時代の眞の精神は私達の胸先三寸に〝温古知新〟と銘打つ鋭い刄を眞劍な表情で突きつけてゐる。吾々は今かゝる立場からアメリカ論を一瞥しよう。

×　×

我國の過去に於ける飛躍の歷史の、序曲に含まれた時代の革新期に方つて、問題として日本歷史の前面に打突けられてゐるのは常に亞米利加の問題である。黎明日本を驚かした黑船の到來とは異なる意味に於て、我々の時代に課せられた聖祀の壯業の前面にも再び巨大な合衆國の姿が愈々大きくクローズアップされつゝあるのであつて、この問題の解決が吾々に對する試金石的な意義を有する限りに於て、彼の國の客觀的認識を企圖しようとする此等の著述の刊行は等しく讀書人の注目を奪はずにはおかない。

然しこのことは必ずしもこの國の亞米利加研究が最近迄粗略に過ぎてゐたことを意味するものではない。既にわが國の學壇には大先輩新渡戸博士をその先驅者として公法及び政治學界の有力な學究がこれ等の事業に參加して來たし、美濃部、藤井、土橋、中野の諸博士、高木八尺教授等はこの分野の有名なパイオニーヤとして輝いてゐる。それ等の人々が殘された學蹟は決して少しとせず、其學問的功績は又東京帝大のヘボン講座に歸せられるべきであるけれども、國際法的史眼を通じて行はれた綿密な綜合的檢討は茲に擧げた松下教授「米國戰爭權論」（有斐閣刊）の著述に於て初めて遂行されたと言ふ事が出來る。

著者は先づ本書の冒頭に於て「本書は……亞米利加合衆國を憲法學的及び國際法學的角度より眺め、其行動を通じて亞米利加の本質を究めん……」とされ、叙述の順序として先づ第一編に於て亞米利加憲法政治の基本主義、大統領の國内法的並に國際法學的地位を說き起し、第二編に於て合衆國の戰爭權、第三編に於ては聯邦議會のそれを更に第四編に於ては大統領の戰爭權に論及されてゐるのであるが、著者は本書の表題が示す如くこれ等の諸研究の中心的樞軸を亞米利加合衆國の戰爭權といふ一點に集中し其論證の經路を一面に於ては法律學的研究に置き、これをかの國の聯邦主義及三權分立主義の如き諸機構に於て表現する。かやうにして松下教授はそれを「戰爭の開始、遂行、終了の如き極めて重要なる政治的事實が一應法律的に概念され、認識され、從つてその程度だけ法律學的制約を受ける」ものとされてゐる。（七三）

教授は現代日本の持つ秀れた第一線の米國研究の權威であり、其處女作である本書に於ては元田研究室の多數の蒐集資材を巧に驅使して緻密な實證的研究を遂げられてゐるし、其檢討の深さに就て見るもハミルトン Hamilton を中心とするフェデラリストとジェファソン Jefferson を盟主とするレパブリカンの對立等に至る迄夫々部分的には觸れ、或程度に於て其叙述は成功してゐると言ふ事が出來ようが、茲に吾々が注意しなければならぬ最初の問題は亞米利加國際法一般、殊に條約に關する批准及效力を繞るフェデラリストの貢獻であり、その成果はアメリカ國際法思想史上に於て沒すべからざる一大波紋であり、其國の政治的勢力の對外思想への影響を最も鮮明に描き出したものである事を吾々は充分知悉すべきである。此歷史と其環境の姿は法と政治の理論的紊聯の危險を充分知つてゐる吾々にも尙且つ大きな魅力を呼び起さずには措かない。實に此事實はアメリカ國際法史上にコウナア・ストンを置いた事實であり、これにエポックを劃するものである。

從つてかゝる著者のこの企圖が國法學的乃至は國際法學的檢討に存する限り、且又著者がその歷史的檢討を企圖する限りに於ては亞米利加國内は勿論、凡ゆる國々に遣された古典思想的著述の裡にも著者の汲み取るべき多くの論點が伏在するのであり、反面吾々は國際法及び國内法の解釋は亞米利加に關する限りこの問題に對する多くの根本資料は數多の地方裁判所の判決中に容易に見出す事が出來る。この事は既に此方面の專門的學徒に依つて充分自覺せられてゐる（チャレス・バアグラー）著者はそれにも不拘、これ等の點を充分

顧慮されてゐるであらうか？私は亞米利加に育つた學究である著者に對してこそ、かやうな諸點をも顧慮し得る充分の能力をも要求し得るのではなからうかと念じてゐる。私はかやうに考へてゐるけれどもそれは老婆心と言ふ樣な潛越な考へからではなく、かゝる資料の眞活用こそ其叙述により客觀性を與ふるものであると信ずるが故に外ならない。

× ×

從來、亞米利加國際法の理論的展開の實質的契機は一七八九年の亞米利加憲法の成立に初まると言はれる。亞米利加憲法は國際法の基礎づけの下に立つてゐるのであり、之等の理論的萌芽はグロチウス、バイシケルスフウク、ヴアッテル其他古典法理論家の遺産に俟つ處は極めて多い。それは亞米利加國際法の第一原理であり、之が解釋の衝に在つたマアシヤル、ホイキトン、ケント及びストウエル等、かの國自身の國際法學者の業蹟を檢討することは殊に交戰者、中立といふ如き問題を中心とする限り極めて重要であると言はねばならぬ。

かつてフランクリンは亞米利加國際法理論の裡に打樹てられた海洋自由の理論的契機を佛蘭西のアベ・ド・マアブリヤの歐洲公法に借り、伊太利の海法學者アズニに求めた。現下の學界が求むる學究は古典に沈思し、法の眞の精神を茲に探求しつゝ新しき新法秩序の創造に寄與する良心的な理論家であると私は確信してゐる。著者の本著に於ける總論的叙述がこゝ迄進出してゐたとすれば其理論的價値は一層その歷史的意義を增大したことであらう。

次に著者は亞米利加對外政策の歷史であり、更にかの國の政治思想、國民主義を表象し、亞米利加のイデイオロギーの發達をさへ包含してゐるモンロー主義に對して其意義と作用を回顧し、尙且つそれが理論的裏打である〃不干涉主義〃所謂スチムソン主義に對してもそれが國內政策より國際外交政策への轉換の經路を明らかにしてゐない。本書の如き米國の現在の姿を理論の脚光の下に正視しようとする著述に於て何故に近代の日米外交理論に騷然たる波紋を投じた不干涉主義が無視されねばならなかつたのであらうか？著者はかやうに亞米利加兩大陸及び歐洲大陸に於て取扱はれ來つた所謂アメリカ國際法に對しても全く沈默を守つてゐられる。私は所謂〃相互尊重の原理〃の下に「血の國際法」の理想を含む地域的秩序の原則に基く新秩序國際法の性格（藤澤親雄「新秩序國際法の基本的性格」中央公論本年十二月號所收）を理論的側面に於ては到底全面的に受容し得ないが、反面或學者の說くところの〃アメリカ國際法〃を國際法思想のアメリカ的受容と解することはかの國に關する限り國際法の現實的性格を把握する上に於ては極めて重要であると考へる。

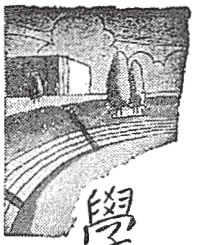
吾々は教授が本書の叙述の過程に於てかやうな資料の眞の活用こそ本書の理論を更に一層の價値多き段階に導いたであらうことを想像しつゝもその實行の困難さを自覺するとき尙且つ本書の有する先驅者的オリジナリテヤに深い尊敬の念を禁じ得ない。

私はこれ等の價値を高く見極はめ乍ら同時にデ・パーキンズの著述〃モンロー主義〃（豐田義道氏譯、山水社刊）の歷史的研究の美事な成果を興味深く讀むことが出來た。原著は一九三七年上梓されたモンロー主義理論の歷史的研討である。外國を語り、其の對外政策を批判しこれに對處し得る能力はその外國の歷史そのものゝ裡に貫流するその民族の精神の發現を無視しては到底これを養成し得ない。クロオスと言ひ、アルヴアレエズと言ひ主題に關する專門的歷史的名著は多いけれども現在に生きる吾々の教養は少くとも本書の指示する水準に迄到達する必要があるのでせなからうか？本書の價値は全く此處にある。

慶應大學記念論文集

時局の進展につれて政治・經濟・文化等あらゆる分野に於ける變革は實に目まぐるしい特に政治經濟はその豫測をゆるされない程である。この事は學術を初め國民生活のあらゆる面に表はれねばならない。ヂヤーナルなものを目標とした雜誌の範圍內にあるとは云へ、慶應大學經濟學部の機關たる「三田學會雜誌」にもよく表はれてゐる。その一二を拾つて見ても加田、奧井金原、武村の各教授の論文を見ても新體制新秩序、國防經濟等、或ひは技術學の問題を取つた黑田氏の論文の如き、常に現實と接近した學術の研究成果を見る。以下目次の概略を擧げやう。

道路交通の安全と自動車速度の制限に就て（增井幸雄）△有機的貸借對照論に就て（三邊金藏）△德川時代村落研究序說（野村兼太郎）△新體制と統制經濟（加田哲二）△計畫化と統制（奧井復太郎）△世界經濟新秩序と國際經濟體制（金原賢之助）△國家政策に於ける統計の任務と限界（寺尾琢磨）△勞働者政策の基本問題（藤林敬三）△財政學の理論的課題（永田清）△國防經濟欲求（武村忠雄）△地理學的研究の對象と課題（小島榮次）△勞務管理に關する若干の考察（小高泰雄）△中世諸威の農地世襲（高村象平）△農業經營規模について（小池基之）△商業學の對象と體系（岩田俊）△大陸政策の展開過程（山本登）△新東亞指導理論の瞥見（望月玉三）△消費性向と乘數理論（千種義人）△テヒノロギーの系譜（豐田四郎）△正價思想史概觀（高橋誠一郎）



學内報

各部授業日割

	終業	始業	備考
大學各學部	十二月十九日	一月十一日	第二學期 第三學期
大學豫科	十二月六日	一月九日	學期試驗（自十二月七日至同十七日）
專門部各部	十二月廿日	一月十一日	國民體力法檢定（十二月十七、十八、十九日）

大阪師團管下 大學高專 秋季聯合演習參加

秋晴れの十一月十二、十三の兩日にわたつて信太山演習場に於て開かれた大阪師團管下大學高專秋季聯合演習に南軍第二大隊として本學學部、豫科、專門部一部では最高學年これに參加、優秀な成績を收めて時局下有意義の演習を終へた。

尚同月十五日より行はれた中等學校聯合演習には、本學附屬關西甲種商業生の參加もあつた。

産業報國精神 特別講義行はる

十一月十六日午後一時より豫科講堂に於て産業報國精神特別講義を行つた、これは文部省指令により日本ペイント社長小畑源之助氏によつてなされたもので、近來頓に興りつゝある我が國獨創の産業報國運動を、その趣旨概要に就いて學生に一應の知識を與へんとするもので、當日の參加學生五百有余名、該運動の全貌を掴み得て多大の感銘を受けた。

國民體力法檢定

本年より全國青年中滿十七歳より滿十九歳の男子に行はれる國民體力法檢定に本學豫科、專門部でもその範圍に當る者もあるので左の通り夫々實施した。

十二月七、八、九日　專門部一部

十二月十七、十八、十九日　大學豫科

故西園寺公望公 國葬遙拜式

十二月五日故西園寺公國葬當日、本學に於ては哀悼の意を表するため午前十一時四十分千里山學舍、天六學舍同時に遙拜式を擧行、默禱、訓話を行つて故公爵の遺德をしのび奉つた。

防火デー

防火週間の最終日である十二月六日本學學部に於ては午前十一時、梨本宮殿下より全國警防團に賜りたる令旨奉讀式を擧行、終つて後學部防護團を結成、防火並に防護團結成に對する學長の訓話が行はれた。

本年度査閲實施

本年度査閲は昭和十五年もおしせまつた十二月二日學部、豫科に、同十九日專門部一部に夫々行はれたが新體制下初の査閲であり、高度國防國家建設を目標としての事とて相當嚴格を極めたが、千里山に於ては、「前年度より數段の好成績を示し成績極めて良好」の講評を査閲官、師團司令部附松井少將より賜つた、又專門部でも數段進歩を示し良好の成績を收めて〝關大〟の面目を大いに發揮した。

新體制協議會

十一月十六日一旦新體制の前期的協議を終了した本學では、同十七日學友會長の名を以て三學友會の新事業を停止し學友會委員、幹事に三月までの留任を命じ新體制卽應の熱意を示したが、引續き本月十日學部では學部長主事會議を開催、學部案の大綱を決定し、又豫科專門部でも夫々對策を決定、同十六日の本學綜合部科長會議に諮つて具體策を審議したが、更に愼重研究をつゞけてをり、その發表は新學期に入つてからの豫定である。

校友推薦

財團法人關西大學寄附行爲第十六條二項により今回左の二氏が校友に推薦された。

小林壽夫（大阪）　福山市長

森芳松（和歌山）　泉尾土地支配人

がくほう抄

十二月十日本學視察のため文部省督學官宇野喜代之介氏來學、午前中天六學舍、午後千里山學舍を夫々視察された。

高級國産書籍

十二段家書籍

大阪市難波御堂筋東入

電話 千三四七三

校友會報

有意義、嚴肅裡に 本年度 校友總會終る

校友の意氣愈々盛

菊薫る十二月一日大阪中之島中央公會堂に於て昭和十五年度校友總會が開催された、定刻五時半出席者七百名を得て盛大に開會、三階大食堂をうづめ盡す校友の集りは司會者の指揮に從て宮城遙拜、默禱、國歌合唱と肅然として威儀を正す感があつた。次で會長挨拶副會長本年度事業並に會計報告を終つて

昭和十五年度

事業並に會計報告

恒例によりまして本年度の事業並に會計報告を申し上げます。

本年度は昨年度に比し本會の事業とその量並に質に於て相當進歩の跡が認められますことは本會の躍進振りを如實に示すものとして慶賀に堪へませぬ。これよりその大略を申述べたいと存じます。

一、會員名簿――先づ第一は會員名簿であります。去る五月發行致しましたものは前年度發行のものと編輯方針を一變しまして其の趣を改めますと共に、内容の正確を期したのでありますが、そのため發行期日が甚だしく遲延し皆樣に種々御迷惑をお掛けしました事と存じます。深く御詫び申上げます。これは從來の儘では非常に膨大な量となり且取扱上不便な點もありましたのでこれに對する改革として行はれたものでありますが、尚完全なものとは申されません。更に近く發行の豫定であります新名簿は前の名簿の不備を一掃し、より正確便利なものとして出來上る樣編輯の上に特に注意を拂ひ卒業年度別索引や改姓名一覽等を設けました。尚茲でお願ひ申し上げたい事は、相當の努力を拂つて居るに拘らず住所職業依然空白のまゝ殘される部分もありますので、住所並に勤務先御變更の場合は直に本部宛御一報下さいます樣、又御友人のものに就いても御氣付の點がありましたら同樣御通知下さいます樣皆樣の御協力を御願ひ致します。

二、新支部結成――第二としましては本年一月結成を見ました德島支部を初めとする新支部の設立でありまして、本年度に於ける結成は前述の德島支部の外三月結成のハイラル支部、六月結成の富山支部、十月手續完了の西宮、上海、岸和田、福井の七支部であります。斯くの如く新支部の增加致しますことは母校の運命共同體としての校友會に、多大の御關心を有せられる證左でありまして、誠に感激に堪へません。又最近に於ても尾道三原、福山を中心とする支部結成運動があり、又堺、和歌山、三重、北海道、北京にも同樣の運動が見られますので、今後益々新支部の增加を見ることゝ信じます。本會發展の一現象として御同慶の極みに存じます。

三、會員相互の親睦――第三に「本會の目的の一の一たる會員相互の親睦を旨とした事で、本會關係者の英靈に對しては弔意を表し、葬儀に當つては供物、弔辭等を供へ、又同窓の榮進、榮轉に際しては、祝辭を贈りなどして極力右趣旨に添ふ樣致して居りますが、未だ不十分と思はれる節もありますので、今後も大いに努力したいと思つて居ります。

四、校友會誌の發行――第四に擧げられるものは、校友會誌の發行でありまして、從來校友の動靜は出來得る限り學報に輯錄して參りましたが、本會の興隆につれまして、各位の御投稿も豐富となり剩へ一部ではこれでは物足らずとする聲もありますので、今回萬難を排し紀元二千六百年記念事業の一として學報附錄の形式を以て新に發行せられたものでありますが、初めての事とて種々不備の點もありましたが、相當大なる反響があり、當事者一同意を强うして居ります。

五、講演會開催――前述の校友會誌と同樣紀元二千六百年記念事業として、前月二十二日本會主催の下に大學本部講堂に於て、佐々木惣一博士を招聘してその第一回講演會を開催致しました處非常に盛會で極めて有意義であつたと存じます

今後は毎月一回校友會主催の講演會を開催する豫定でありまして、將來は外部進出も考へて居ります。御通知はその部度何等かの方法で致しますから、各位の御出席を懇請致します。

六、校友會館に就て――次に校友會館に就いて一言申上げます。本年二月校友會紀元二千六百年記念事業として校友會館建設の計畫を樹てました處、各地校友各位の絶大なる御贊成を得、直に巨額の寄附申込すら受くるに至り、當局者も感激して之に當り、一千名餘の建設委員、百名の實行委員の選任の運びとなり、いよいよ實行に移らんとする際、時局の進展により社會情勢は急轉換を來たし、此種建造物に對しては當局の建設許可は勿論、その爲めの寄附募集すら認められない狀態に立ち至りまして、只今の處何時之が實現可能となりますかその見通しもつきかねる有樣であります。然し本會としては飽く迄初志を貫徹致す所存でありますから、この見通しのつき次第着手致すつもりであります。何卒此點御諒承下さいまして今後の御高援を特にお願ひ致します。

最後に昭和十四年度の**會計報告**を申上げます。然し會則上會計年度は本年三月末日までとなつて居りますが、取扱の都合上、前年通り昨年末現在の收支計算につき申上げます故豫め御諒承願ひます。

收入は一般收入として

會費拂込者一、五六七名金額四、七〇一圓、預金利子三四圓七二錢、雜收入二圓、校友總會々費三七七圓合計五、一四

○圓七二錢でありまして、前年度繰越金五三圓六四錢を加算し、五、一六八圓三六錢であります。

支出は雇員諸給費四七七圓五〇錢、校友總會費一、一一四圓〇一錢、學報費七二〇圓五三錢、通信費四〇七圓五〇錢、印刷費消耗品費、雜費其他四七九圓二二錢にて合計金三、一九八圓七六錢にて差引一、九六九圓六〇錢が本年度へ繰越となつてゐます。

基本金收入は一時拂會員三名分一五〇圓、寄附金五圓、預金利子一三圓〇八錢にて前年繰越金六五九圓三五錢と加算して合計金八二七圓四三錢となつてゐますこの方は支出はありません。

尙本年度に於きましては既に會費拂込者四千六百名を超え、昨年の三倍を突破致しました。これは一に會員各位の御熱誠なる母校愛の發露の賜と感謝致す次第であります。

今後におきましても「本會の目的一達成のため何卒各位の倍舊の御盡力を併せて茲に御願ひ致します。

以上によりまして何卒御承認を願ひます。

議事に入り、評議員任期滿了のため改選をはかれば全員會長附託に一決、質疑に入り、次で本學吉田理事より學校現況及び學園新體制への心構へを聽取、益々母校への熱情を强くして一旦休憩、晩餐を共にし和氣藹々と懷舊談近況談にふけり次で、第二回月例講演會として石川興二博士の「帝國の危機と新體制の意義」なる講演を拜聽氏の一貫して說く「和」の精神に始終感慨を新に團結の心を固め九時半散會したが、皇紀二千六百年の佳き式典の後を享けて、新時代への息吹きも熾烈に乘出さんとする母校關西大學の運命共同體として力强く後援指導せんとする校友會の本年度に於ける總會は比例なき多數出席者を得て最も有意義に而も嚴肅に開催出來た事は校友各位の熱烈なる母校愛のしからしむる處として感謝おくあたはざるものがある。

評議員會開催

十二月一日校友總會を前に午後三時より中央公會堂二階小集會室に於て本年度評議員會を開催、四十數名の出席者あり何れも社會の重責にある人々として種々校友會への意見を吐露された。本部より提出された議事中總會に於ける事業並に會計報告案滿場一致可決し、集金郵便廢止後の校友會費拂込方法を諮つたが、集金屋委囑、支部別集金等種々良案が提出されたが一應本部に於て再檢討する事に決し、又支部側から若し支部別集金ともなれば支部加入の人員整理等行ふ必要上本部に於て各支部の名簿作製を願ひたい旨申込みがあり、本部に於て準備する旨回答されて議事中止、雜談に入り和やかな雰圍氣に包まれて散會した。

校友會新評議員氏名

阿部　正一　阿部　正貫　淺沼　淳
荒賀　勝平　安達彌五郎　井上　軒
板野　友造　糸島實太郎　今田　光匡
岩崎　卯一　植田　完治　梅田　茂
江原　文造　大川　光三　大月　伸
大島　武夫　小笠原語咲　織田佐代治
岡野　廉平　遠部逸太郎　樫本　信雄
柏元　孝治　賀來　俊一　河村　宜介
桂　忠雄　加藤　清　加藤金次郎
金子金次郎　神宅賀壽惠　神屋敷民藏
寒川　喜一　菊池　勳　岸村德太郎
岸本　芳夫　北辻　勝　北原　元茂
木田幾右ヱ門　木下清一郎　楠野　泰夫
後藤田德太郎　小西健左ヱ門　小堀　登
佐伯　三郎　里見　復二　里村安二郎
佐野登喜雄　志野覺治郎　神保　敏男
鈴木　武夫　角田好太郎　關　豐馬
田中　藤作　田中　久雄　高梨　乙松
武内　省三　武田藏之助　武田　榮
武田　宣英　武田貞之助　寺田貞一郎
土岐　陽三　鳥羽源四郎　富田　英雄
内藤　滋治　長尾　梅吉　永井　量一
永井　芳一　永田　良雄　中村　忠夫
中村　德藏　中山　幸市　丹羽　英夫
萩原　敏隆　原田鹿太郎　春原源太郎
樋口哲四郎　福岡　彰郎　藤田百太郎
古川　武　堀本　周三　前川信之助
松尾　七郎　松原　藤由　松本茂三郎
松本標四郎　三島　律夫　南　清
三宅　通夫　村上　喜貞　米良貫一郎
森　明光　森川　大郎　矢口孝次郎

☆戰線だより☆

昭九專一法
昭十二大法　田中　來

毎度學報の御惠贈感謝に堪へません。月々校運隆昌の有樣を知る毎に心から嬉しくなります。

同窓生上田廣藏君が母校專門部に敎鞭を執られるやうになつた事も承はり自分迄が學校に對して肩身が廣くなつたやうに思つて中支の山奥で一人嬉しがつた次第です。（中略）之の課目は我々專門部第一部第二回卒業生にとつては忘れることの出來ない思ひ出の學課です。

第一線將兵の士氣は非常に旺盛で銃後の御後援に恥ぢないと自信をもつてお傳へします。

最近鈍感な私にもひし〳〵と身に戰機の滿ちつゝあるを感じさせられるやうな氣が致します、又ぼつ〳〵忙しくなつて來ることでせう。第一線と銃後とが一丸となつてあと「一と押し」といふ一押し頑張べき時だと思ひます。

×　×

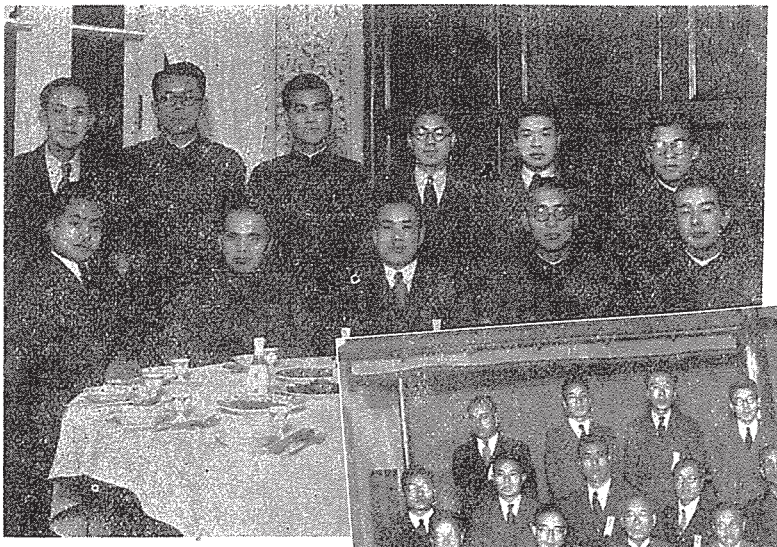
平田喜一郎

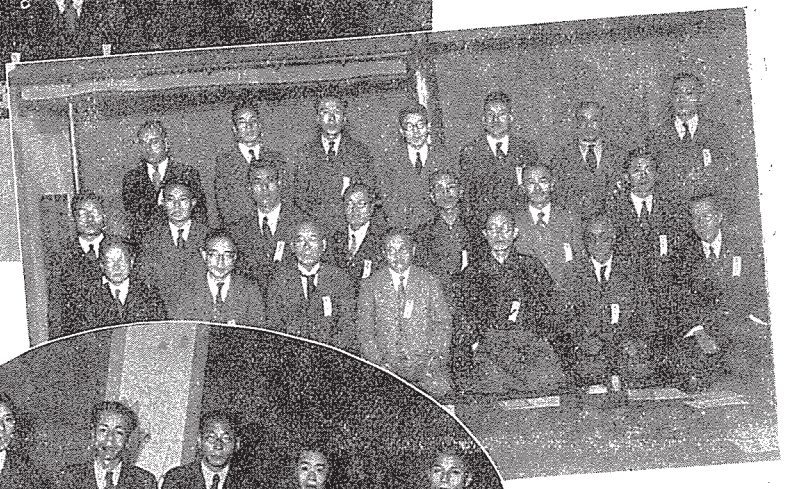
天津の租界内も最近は餘程變つて成りまして以前の樣な種々なる問題も比較的少なくなりました。御承知の英兵（駐屯軍）の引上げ、尙最近の米人の引上げもありまして租界内の出來事も極めて順調に成つて居ります。

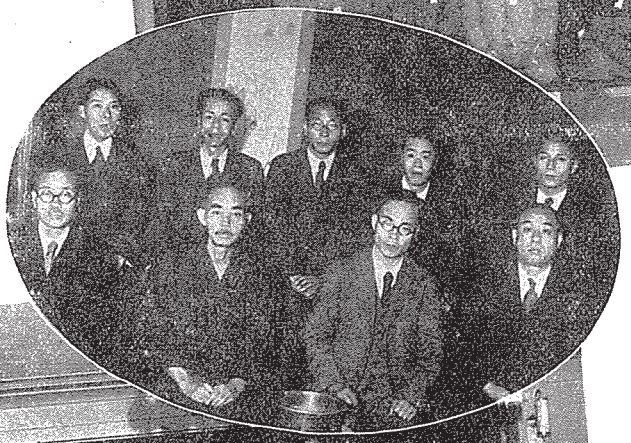
此度種々關係もあり租界内に移住致し

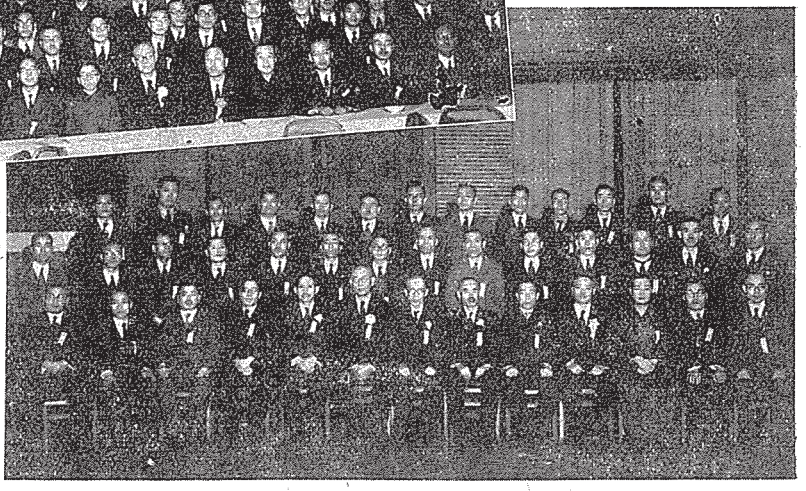
☆寫眞說明

十二月一日、中之島公會堂に於ける校友總會のスナップ【上から】神戸會長の挨拶、本學理事吉田音松氏の學校近況報告、和やかな晩餐、京大教授石川興二博士の講演【下】十一月二十二日本部大集會室に於ける第一回月例講演會、立てるは帝國學士院會員法學博士佐々木惣一氏（校友會報欄記事參照）









合ひ集ふ校友群

【上】十一月十六日の川邊支部總會

【二段目】十一月十一日增成武雄氏を圍んでの新京支部【楕圓內】新結成の備後支部

【下二段目】十二月七日千里山學士會總會【下】十二月八日甲子園ホテルに於ける昭三會第六回總會の各記念寫眞

安川勝太郎　藪下　益治　山崎　敬義
山本　恒夫　四辻　詮　吉村　種藏
和田　豐二

◎會則第十二條ニヨル評議員氏名

池田　重吉（福岡）　梅田　鶴吉（德島）
大野政一（海拉爾）　岡内　瀞一（高知）
岡本　勳治（關門）　梶川多三郎（上海）
片山　元藏（明石）　神戸　正雄（京都）
神崎傳次郎（岡山）　木下林三郎（青島）
佐藤　清（川邊）　雜古　貞雄（西宮）
高濱直一（關東州）　谷口　武雄（石川）
辻野新一（岸和田）　内藤　正剛（大阪）
内藤　哲應（福井）　直吉己一郎（奉天）
長野　友市（愛媛）　中場彌太郎（備後）
中村八十一（臺灣）　西　雅雄（牡丹江）
野田文一郎（兵庫）　松尾　高一（尼崎）
松澤　卓規（東京）　松本　正寛（朝鮮）
三原　隆輔（新京）　宗本　利市（東海）
村上伊三雄（チ、ハル）　蔡藏吉（鹿兒島）
矢野　兼三（富山）

佐々木博士のもとに
第一回講演會開く

本會では皇紀二千六百年奉祝事業の一として月例講演會を開催する事に決したが、去る十一月二十二日その第一回を本部大集會室に於て催された、即ち帝國學士院會員、法學博士佐々木惣一先生による「帝國政治の進展と帝國憲法」であつて、多數眞摯な校友の參加を得て非常な盛會であつた、因に同先生の講演を要約すれば左の通りである。

二千六百年を視ふといふ事はその長く續いた共同生活の強さを視ふものでなければならぬ。若し云へるならばそれは二千六百年中の最近六、七十年の間を通じての共同生活の強固さによるものである。然しその間に外國との接觸が目まぐるしかつたため種々迷はされた樣である。結局我々日本人は日本本來の姿に歸つて見直す必要があらう。此の事は依存といふ意味から青年の場合、國家的見地からすれば青年の將來へ嘱望するといふ氣持を捨てねばならない、青年はその若さ純眞さに於て國家に益するものがある。然し依存をやめといふ事は、外國から鎖國せよといふのではない。外國に大いに學んで大いに捨てねばならぬ。國家を動かすあらゆる力、經濟、文化、藝術等の力は外國を參照出來るだけ參照して又大いに捨てる心掛が必要だ。然し眞に國家を動かす原動力となるものは、日本では古來から政治であり、政治は諸々の力の統合をはかるものである。そして帝國憲法は　天皇が國家を動かす政治の根本として規定し奉つたものであるだから政治は帝國憲法を見落してはならない。我々が國家的力の制約をはなれては國家人として存在する事は出來ない。この意味から政治は各個人が自分といふものを忘れない事にあると思ふ。

以上

備後支部發會

輝く紀元二千六百年を記念し、廣島縣東部尾道、福山、三原の三市を中心に、居住する備後地方校友を打つて一丸として校運の隆昌と翼賛の一助を期し辯護士中場彌太郎氏（尾道）福山市長小林壽夫氏（福山）縣會議員竹内利太郎氏（三原）三氏の發起の下に結成することになつた關西大學校友會備後支部發會式は、瀨戸内海の明眉な風光を一眺におさめ、出入船に賑ふ初冬の南港都尾道の川幅ほどの尾道水道に臨んだ尾道一流料亭竹村家において、本部から學報局神尾敷民藏氏の臨席を得て十四日午後六時から盛大に擧行した、相會するもの八名、その他は熱烈な愛校心に燃えながら諸種の事情で參加出來なかつたものであるが、次回こそは必ず出席するいづれも熱意を示してゐた。

かくて正六時を期して開かれた式はまづ東方遙拜についで本學關係者その他の出征將兵の武運長久と併せて本學關係者その他の戰歿勇士の冥福を祈るための默禱を捧げ、發會式をあげるにいたるまでの經過報告があつたのち中場氏を座長に推して會則を審議決定し、支部長選擧の結果滿場一致で中場氏を支部長に推し中場新支部長から副支部長に小林福山市長竹内縣議兩氏を推し三市に一名づゝ幹事を選任することになつたが福山、三原兩市の人選は兩副支部長にそれぞれ一任、ましたから住所を御通知致して置きます

何卒皆樣に宜敷。

十一月十八日

×　×

丸田豐吉

謹啓　時候益々清涼の趣と共に校友會益々時局に相應しき發展の由小生遙か中支最前線より深甚の慶賀に堪へません。

學友並校友の皆樣が聖戰に或は銃後に在り、時局先導者として第一線に御活躍なされるそれ一重に滿足致し居る次第です、陣中に於ても同窓の多數御奮闘致される由を或る一部の方々から聽聞致しますれど小生等何時も最前線に在りますれば之等同窓の方々と會ふ機會少なく又會つても各々姓名を知らないと云ふ有樣之至極殘念と致して居ります。

度々の御後援御配慮を賜り甚だ恐縮致し居ります、七月の學報確實に拜受致しました。實は小生も此度表記部隊にて君國の大事な兵隊樣の保健に務めさせて頂く樣になりました故何卒今後共何分の御厚誼を給らん事を切望し益々校友會の大發展を伸び行く學窓の幸在らん事を中支前線より祈上げ致します。

先づは乍失禮葉書にて御通報迄　敬具

×　×

中支○○にて　**武藤勇**

拜啓　中支戰線にも秋冷の氣漂り申候陳者毎月學報の御送附誠に有難く厚く御禮申候。

早速御通知申可き筈の處兵馬倥偬遂に

尾道市の幹事は御堂河内朝日新聞記者を指名、中場氏の支部長就任挨拶、本部代表神屋敷氏の本學内および校友會本部の現狀報告をかねての挨拶があつて祝電を披露し、關西大學々歌、同學生歌を齊唱して目出度く發會式を終り直ちに記念撮影を行ひ懇親會を開き歡をつくして最後に中場支部長の發聲で關西大學の萬歳を、神屋敷氏の音頭で關大備後支部の萬歳を三唱和氣滿つるうちに同九時過ぎ盛んな幕を閉ぢたが備後支部はかくして力强い發足したのである、祝電を寄せられた各位に對しては深く感謝いたします。

校友會長神戸學長、校友會大阪本部、同兵庫縣川邊支部、在阪福山出身木藤安之氏、三原市糸崎町河合滸一氏

なほ當日の出席者は左の通り

中場彌太郎（明三二法・辯護士）高尾英（推・辯護士）稲葉正雄（大二法・辯護士）御堂河内四市（昭五法・大朝尾道通信部）松本政夫（昭六法・尾道青果會社重役）金田幸彦（昭九商・尾道市都市計畫課）吉原秀造氏（昭一〇法・金物商）泉隆三（昭一五法・熊谷工場）

（御堂河内記）

千里山學士會總會

近年頓に内容充實し其の活動を期待されるに至つた千里山學士會は去る十二月七日午後五時より日本橋ブラジル館に於て皇紀二千六百年の奉祝を兼ね、昭和十五年度總會を神戸會長の下に會員百餘名出席し盛大に開催した。

先づ皇居遙拜、護國の英靈に對し感謝の默禱を捧げ、神戸會長より聖戰下の會員の覺悟に就いての所感あり、角田理事長の會務報告兼挨拶あり神保理事より會計の報告を爲し母校並に學士會の萬歳並に思ひ出の學歌を唱和して總會を終つた

引續き懇親會に移り一同杯を擧げて相互の健康を祝福し千里山時代の懷舊談に花を咲かせ眞に和氣靄々斯くて宴終るや記念撮影を爲し更に一同着席、各卒業年度代表者一名より挨拶を爲し母校の隆昌に對する希望、學士會の向上發展に關する熱烈なる意見の發表等あり要約すれば母校の内容充實、學部校舍の可及的迅速なる擴張、專任教授增加、學友會の改革新體制にそひ運動競技の强くなる樣留意すること、中學校新設の希望、理事者教職員も留意して學校と卒業生と連絡を取る樣考慮すること等の如くであり、是に對し理事より夫々答ふる處ありて意義深き會合を閉ぢた。

大阪支部秋季懇親會

京洛見學行はる

本會支部中最多數の會員を包托する大阪支部ではその秋季懇親會を左の通り開催多大の功果を收めた。

秋晴れの十一月二十三日（土）祭日を利用しての同懇親會は、京都方面名勝舊蹟の見學を兼ねて擧行、平安神宮、二條離宮、官休庵茶席等を經巡り一日の清興を娛んだ。

即ち午前九時内藤會長を初め百名に余る會員集合の後京都に向ひ、打ちそろつて平安神宮に參拜、護國の英靈並に出征將兵に感謝の祈りをさゝげ、終つて本學講師時代考證家としての第一人者江馬務先生の御案内にて神宮後方の神苑を拜觀後大鳥居前にて晝食を共にし、次で二條離宮に至り同先生の詳細なる御説明を得て感銘深きものがあつた。續いて同離宮近隣の憂國學者伊藤仁齋、東涯兩先生の舊宅、遺愛の品等を拜觀、本年官幣大社に御昇格の白峯神宮に參拜し、次で洛北武者小路に千家由緒の官休庵茶席を訪問千宗守宗匠の御案内にて茶道縕奥の聖地に眞の日本的性格を把握する事を得た。

次で午後五時四條河原町「鮒鶴」に會して懇親會を開催、先づ内藤支部長の挨拶に次で學内近況報告、會計報告を得て母校への熱誠を强うする等思ひ出多き一日の清遊を惜んで午後八時散會した。

東京支部

十一月十八日午後五時日比谷公園内松本樓に於て東京支部秋季總會を開催す。開宴前板橋菊松氏より大政翼贊會に關する有益なる御話があつた、六時半食卓に着席松澤支部長は立つて皇紀二千六百年奉祝に關する辭を述べ全員起立の上

延引申譯無之候へ共小生本夏中支方面の第一線に於て聖戰の一翼に參加仕る事と相成候、北滿に警備する事三年其間或は匪賊討伐にソ滿國境の警備に更に昨夏はノモンハンに轉戰仕り候ひしも間もなく停戰協定に依り再び北滿に引返し北邊の守備に任じ居りしに今夏の中支前進は將兵一同の待望せし處にて一同は大いに張切り夫々第一線の警備の任に就き居り候執拗なる新四軍の後方攪亂の討伐、遊擊隊の掃蕩亭日なき有樣に候。

目下小生等警備の地は過ぐる漢口攻略戰の際我が砲撃のため殆ど壊滅せし街にて當時の猛撃を物語る廢墟立ち並びあり部隊は破損の程度比較的少なき家屋を修理し兵舍に充當致し居り候、住民も次第に歸り來り隔日に立つ城外の市場又相當の殷盛に御座候、目下柿、栗、木炭、穀類等の出盛時にて糧食に窮しある新四軍遊撃隊等の出盛時にて糧食に窮しある新四軍遊撃隊等斯る市場に出づる良民を襲撃すること屢々、其都度討伐に出動致し居候愈々秋深く冷氣身にしみて參り候。

先は右御禮を兼ね小生の異動と近況御報知迄

敬具

十月三十日

× ×

昭十一大法卒　南出　弘

平素は意外に御無沙汰仕り申譯無之候。内地にては今頃は秋酣と存候、當地は尙シャツ一枚の暑さに御座候へども夜間は毛布一枚では追ひ付かぬ程涼しく相成候新體制の聲も風の間に〳〵戰地まで聞え

宮城遙拜

戰歿者英靈校友物故者慰靈に默禱を爲し奥村安松氏の發聲にて

天皇陛下萬歳を奉唱して開宴、後ち出席校友の自己紹介により親密の度を増し和やかに閉宴、別室に於て先般中支より應召解除の爲め歸還せられたる諏訪富三郎氏の感想談、大村喜覺氏の敬神崇祖に關する御話等ありて午後九時に散會した。

當日出席の校友氏名左の如し

（順序不同）

前田　正利　小林儀三郎　中村　峰藏
渡邊　義衛　古田吉五郎　福田　繁芳
加邊　力　諏訪富三郎　松澤　卓規
山本仲次郎　毛利　兼保　永田宗太郎
今野　勝久　板橋　菊松　大月義平二
藤田　實雄　阿澄　秀夫　大村　喜覺
貴志　房廣　三森　武雄　安村　竹松

珍客を迎へて
賑ふ新京支部

新京支部國都會第十七回例會は十月廿六日大光ビル青葉グリルに於て開催、新に專門部元教官菊地宗三郎先生、野球の西村幸生君、校友會新京支部草分けの一人である有藤立生君等を迎へての賑やかな會合であつた、新人歡迎の例として入滿當時の感想と校友會への希望を委囑する、今夜の菊地先生の入滿當時の感想は多分に我々を益するものがあり、野球博士西村君の「校友會へ希望する」辯も亦なか〳〵に嬉しいものであつた。當日の出席者は

大山彦一、菊地宗三郎、三原隆輔、有藤立生、西村幸生、今村茂、江崎基、桑島良信、三宅良孝、志岐五六、太郎良松美、佐藤孝智、下原太郎、佐藤丈夫

▽……

第十八回例會――前同樣青葉グリルで開催、興安西省林西興農會作社の山中木太君、庭球部のホープだつた名劍淺治氏（昭三、大法卒）等の珍らしい出席があつて非常に愉快だつた。

出席者　名劍淺治、山中木太、村上伊三雄、岩崎繁男、三宅良孝、岡澤三雄、佐藤孝智、西村幸生、中村治雄、江崎基、桑島良信、光田健一、大郎良松美、邑岡亮、志岐五六、佐藤丈夫

增成武雄氏を圍んで

滿洲方面支店巡視のため十一月十一日新京に立寄られた校友增成武雄氏（增成動力工業會社常務取締役）を迎へ、當支部顧問で同氏の親友である廣瀨義雄氏の肝入りで實は增成氏に御馳走になる會を開催した。處は大馬路の鹿鳴春、出席者三原支部長以下十名であつたが、その席上國都會の活動狀況を聞いて頂き、大阪在住校友の動靜など拜聽し主客交々語る內に靄々たる愉快な會合を閉ぢる事が出來た、學報を通じて增成氏に厚く御禮申し上げる。

秀麗會の記

關東州支部では十月十七日第五十四回例會並に秋季總會を中央公園の南華園で催した、當日は神嘗祭でもあるので會場は午後から開放、定刻前には既に談話會が開始されて、いつもの烏鷺戰も展開、又一方には謠曲が始まつてゐる、「弱法師」に瀨戸內海の景色を點綴する、高濱室山の各社長が謠ひなす朗々の響きには南華園の庭も聽きほれた事だらう、あとは高濱老の謠曲談義が暫く續く。

今回は秋季總會と云つても別に議題があるわけでないので全く朗らかな例會である、中川文平君の新入會の挨拶があつたり、結城君の奉天轉勤の挨拶があつたりした、久振りで新人の顏が見えたのは嬉しいがそれにつけても、もつと〳〵新人が出席して欲しいものである。

話題はそれからそれへと打續いて木村老人の昔ばなしや高濱老の「滿洲の統制問題に就いて」等を聽き、又平井君のお目出度、高濱家のおめでた等おめでた話しで目出度此會を終つたが、尙例會は從來二十日開催のところ大連の飲食店の定休日と決まつたので次から「毎月十八日開催と變更」に決した。

當日の出席者は高濱、室山、村山各氏以下十六名であつた。

川邊支部總會

皇紀二千六百年の祝典が帝都で催され候、一入期待致居候、先は御禮まで

十一月二日

×　渡邊　馨　×

謹啓　時下秋冷の砌皆々樣には愈々御健勝の御事と拜察仕候。降而私儀至極元氣にて軍務に勉勵致居候間何卒御放念被下度候。陳者今般學報第百八十二號及び關西大學新聞第九十八號御送附被下誠に重々の御厚志に多謝致しつゝ難有拜讀仕候

學報、大學新聞等に接する度毎に懷しい角帽時代に歸り、青年學徒時代の回想に打耽けり申候。當方はしげく僻境の爲とてあらゆる文明文化より遠ざかり折ふしの學報等唯一の新知識獲得の素材にも相成り、度々通讀仕居候。

就而銃後諸兄の御熱誠なる御後援の程に感激致すと同時に勇氣百倍の氣持に御座候。聖戰茲に四年も早や相終らんと致し來るべき年こそは東亞新秩序建設に大收獲を期し得べく、一同折角の努力を拂ひ本年度の最終の頑張を相見せ居候次第乍微力小生も御期待に添ふべく一層努力致す覺悟に御座候。時分柄御自�專一祈上候。右御禮旁々

敬具

×　昭一二專一商　星川清典　×

拜啓　その後暫らく御無沙汰致しました皆々樣職員御一同樣には益々御健勝の御事と存じます。小生御蔭樣にて益々元氣旺盛第一線にて御奉公さしていたゞいて居りますから、何卒他事乍ら御安心下さ

た、期せずして會員の胸にも千載一遇の此の聖代に巡り生きた歡喜に、吾等の支部も總會で御祝しようと唱和せられた。時に十一月十七日の日曜、集る者二十二名、場所は寶塚一流の料亭分銅家である明治三十二年出の淺沼副支部長先輩をトップに「ヤー暫く」と御歴々が顔を揃へる、本年千里山を卒へた小田君を入れて老若の倶進譜が和氣藹々裡に奏でられる

佐藤支部長の挨拶、安井、三原兩幹事の會務報告の後、其日特に御來駕を願つた校友會本部の神屋敷氏からその近況事情を承り、著しい躍進振りに慶びを頒つ

記念撮影に一同の健在を示して宴に入る、大政翼賛と母校の新體制を論じ、自己紹介と諧謔を交へて談論風發時刻の移るを知らず、終りに學歌を齊唱し、深川伊丹市長の發聲で母校を、支部長發聲で川邊支部の萬歳を叫んで名殘り惜しき秋を別つたのが九時であつた。

活躍する昭三會

第六回總會開く

昭和三年專門部各科卒業生を以て組織する昭三會ではその第六回總會を去る十二月八日（日）午後六時より甲子園ホテルに於て開催したがこの日來賓として母校より神戸學長、玉木專務理事、正井專門部長の諸先生の御來臨を仰ぎ、會長武田藏之助先生を初め多數會員參集、尾崎幹事の司會によつて先づ南幹事長開會の擧を宣べ、次で光榮ある皇紀二千六百年奉祝の意を表して宮城並に橿原神宮を遥拜、護國の英靈と出征將兵への感謝の默禱を捧げ講演に移り左の次第に依り擧行

一、時事諸問題に就て

學長法學博士　神戸正雄先生

二、新體制運動に就て

會員　大阪府地方課長兼總動員課長　伊場信一君

三、調停寸話

會員　大阪地方裁判所判事　稲井義男君

會員各自感銘を受け、次で記念撮影、晩餐會に移り、會長武田先生の挨拶、玉木理事の挨拶と母校の近況についての御報告を拜聽終つて武田會長、正井專門部長の發聲で夫々母校關西大學萬歳を三唱、田中幹事閉會の辭に引續き別室に於て懇談會を開催、各々自己紹介と日頃の活躍振りや抱負を述べ新體制下職域奉公の誠を以て翼賛の實を擧げん事を誓ひ、始終和親溢るゝばかりに午後十時散會した。

尚同夜は伊場君稲井君の外に、現在兵庫縣勞政課長會員福原政二郎君が「產業報國運動に就いて」と題して大いに蘊蓄を傾ける豫定であつたが、止むを得ざる要件のため出席されなかつたのは誠に殘念であつた。

當日の出席者は左の通りである

來賓　神戸學長、玉木專務理事、正井專門部長

會長　武田藏之助先生

會員（合計四十名）

稲井義夫、戸澤武、小野英敏、大石勝多久和良三郎、谷岡拓磨、村田吾一、丸木利喜造、正井善藏、小寺小市郎、工藤義正、阪上正己、澤岡森之助、銀島萬作、南清（以上法科）、伊秀夫、伊東太平、阿部寛、宮田武敷、西村貞一村上精三、阪倉久治（以上經濟科）、伊場信一、池田昌一、原淑二、尾崎暢男田中久雄、谷口淙一、中橋德藏、信原照夫、松廣壽衞、天野律司、三國光、小俣輝（以上商科）海野丹城、神屋敷民藏（以上文科）

甲戌倶樂部（昭九專一法）

秋季總會開く

專門部一部法科第二回の私達は昭和九年三月二十日の卒業日に學窓時代の數々の思出を殘してクラス會を解散した、然し私達は此の深い友情の交りを社會に巢立つた後迄も持續したい念願が甲戌倶樂部結成の趣旨となり、誕生となつた。以來七星霜毎春秋二回の總會と遠隔地會員の來阪の都度會合を持つて來たが今春來大體毎月懇親會を開催することにもなつてゐる、去る十一月二日の秋季總會を最近の消息として御知らせしたい。

十二月二日午後六時半より心齋橋森永キャンデーストア三階に在京阪神會員十六名の出席者を得て開催、殊に今事變赫々たる武勳を樹て名譽の戰傷を受けられ當地に靜養中の佐野榮二君、目下軍務多忙中一刻を割いて吳れた松本政明君等の特別出席は錦上華をそえる感が一入深かつた。

大陸の功名談、日常談に、はては一度去りし學生時代の追想談と成ると舞臺は一變して一昔前のクラス會へと一躍、滾刺たる氣慨彷彿として甦り食卓を圍んでの數刻は實に和氣藹々として完時九時となるのも知らなかつた、つきぬ名殘を惜みつゝ十二月中旬大阪ビル食堂の再會を約して閉會した。

今後毎月一回懇親會を開催し近く會員名簿と會員消息パンフレットの配布を計畫してゐるが、會員中四五名の住所不明者もあり、其他會員諸兄の近狀等も左記へ御通知戴きたい。

吹田市吹田一、三五三紫雲莊內、堀本

學報五、六、七月號御送附被下有難く御禮申上げます、御蔭にて北支の戰野にあり乍ら母校の樣子や校友諸君の樣子がよくわかり非常に嬉しく存じます。

昨今も大陸はめつきり秋らしくなり、冷たい秋風が颯々と吹いて居り秋の蟲が淋しく鳴いて居ります。高粱も實りの秋近く重たげに穗を秋風にゆらつかせて居ります、時々冷雨が支那家屋の屋根をシトシトと叩きます。

自分達の居る土地も全く治安が確立され邦人の進出めざましきものがあります小生益々體に注意し興亞の聖戰につくします、終りに皆々樣の御健康をお祈り致ます。

さようなら

會員消息

有藤　立生（昭六　專法）滿洲電信電話會社調査局に勤務、住所は新京特別市曙町二ノ一〇ノ四

井上　成章（昭十四專二法）東京市麹町區麹町三ノ七ノ二一に轉居

伊東　祐一（昭三　大商）清津府浦項町、清津日報社に勤務

泉　清（昭四　大法）日本勤産火災保險會社鹿兒島出張所より高知市兵庫町一一、四國支部長に轉任住所は同市二番町二三

今井　忠勝（大十四專經）大阪市住吉區墨江東八ノ三〇に移轉

岩國　眞三（昭八　大經）召集解除となり高知放送局に勤務

江口　榮藏（昭九專二經）西宮市越木岩久出ヶ谷一二に移居

遠藤　富雄（昭十五專法）滿洲國熱河省公署庶務科に勤務、住所は同省承德街後二道街中川下宿

大塚　實雄（大六　專法）松江職業紹介所長に就任、住所は松江市内中原町二二四

奥　與右衛門（昭十四大法）中支より歸還、豐橋陸軍豫備士官學校に入學

奥本　武夫（昭八專一商）大阪市旭區大宮町二八に轉居

掛江　滋（昭十三專二法）滿洲國龍江省訥河縣興農合作社公館に勤務

河相　保知（昭十二專二法）奉天市大和區藤浪町四一に轉居

神田　哲夫（昭九　大法）滿洲國新京特別市安達街六二五滿洲生活必需品會社々宅十一號に轉居

北岡　信一（昭十二專二法）大阪區裁判所西能勢出張所裁判所官舍に轉居

北松　榮一（昭九專一商）大阪市住吉區聖天下二ノ四一に轉居

楠井　文雄（昭六　大法）堺市熊野町東六丁二〇に移轉

小林由太郎（昭十三專一經）小倉市朝日新聞西部本社編輯局に勤務、住所は小倉市下到津一二二七、勇厳園アパート

高　龍　湜（昭十四專二法）高山龍夫と改姓名し、日本東亞必需品輸出組合横濱支部に勤務、住所は同市中區尾上町二ノ二五

狐塚　正雄（昭十五專一經）東部第四十八部隊小笠隊第二班に入營

五藤　邁（昭十五　卒）中華民國安徽省蕪湖江岸路二二、楊子福利公司内に轉居

齋藤　政雄（昭八專二法）大阪鐵道局松阪保線事務所に勤務、住所は松阪市榮町一九四

島田　俊男（昭十二專一法）滿洲糧穀會社大連支店より滿洲國北安街西門外、北安支店に轉勤

新堂　貞夫（昭八專一商）大阪府經濟部商工第一課工業奬勵館庶務課に勤務

近藤　孝（昭十一專一經）十一月末除隊、日本發送電會社に復職、住所は名古屋市千種區田代町鳥金六九ノ二、桑山孝之助方

相馬慶三郎（昭八專二經）東京市淀橋區百人町二ノ一三九に轉居

田中　俊逸（明四四大商）住友生命京城支店より梅田支部長に轉任、住所は大阪府南河内郡狹山村西池尻四八三

田村　文男（昭十五專二法）大阪市役所港灣部に勤務住所は大阪市北區東野田町六ノ五、藤岡留之助方

高井　才二（昭十五專國）中部第四十六部隊に入隊

樽井　豐（昭十五專二法）大阪市南區北桃谷町七二樽井要太郎方に轉居

張　季　興（昭十二專一法）新谷信興と改姓名し咸北道廳社會課より同知事官房國民總力課に轉勤、住所は咸北羅南本町八四

辻元　外男（昭十一專二法）滿洲國牡丹江省寧安縣、滿洲開拓青年義勇隊寧安訓練所に勤務

寺村　春雄（昭十五專一商）千二月一日東部第五十五部隊に入營

外山　英之（昭八　大法）岸和田市岸城町に轉居

頼戸　勇（大十三專商）先般政友會大阪支部書記長を辭し、溝淵鑛業所に入社、滿洲國熱河省興隆に於て興隆縣産金指定收買所創業に携り同地に在り

中尾　定隆（昭四　大法）堀定隆と改姓

中鹽　明男（昭十四大法）西宮市泉町二一に移轉

中本　一勇（昭十二專二法）應召解除となり大阪市東區高麗橋二ノ三二、川崎法律事務所に勤務、住所は大阪府北河内郡友呂岐村平池

永田　旭（昭十二大法）東京民刑事地方裁判所判事より松山地方裁判所判事に轉任

檜原　忠二（昭十四專二商）歸還後東京市世田ヶ谷區三軒茶屋町、東部第十三部隊氣付、東京教育隊第二區隊に配屬

西川　儀貫（昭十專一法）奉天市信濃町九、不二ビルに移轉

西川　一行（昭十四專一商）東京電氣會社東京出張所に勤務、住所は東京市目黒區下目黒二ノ三五七、鈴木方

西森　保（大十四專經）神戸電機製作所に勤務、住所は大阪市住吉區墨江東五ノ五二

野口　茂樹（昭四　大法）下關市豐浦村前八幡第五三

七に轉居

野田　義人（昭十一專一法）東横食品會社を辭し東京電氣工務所鞍山出張所に勤務

原　敏雄（昭七　專商）福岡市西新町二ノ二七九に轉居

橋本　利八（大十四專法）鹿兒島稅關支署長に轉補、住所は鹿兒島市生産町三六

平尾隆太郎（昭十二專二法）大阪市西成區橘通一ノ一に移轉

藤原　寛了（昭十三專一商）内田と改姓、上海北蘇州路四三四號、上海内河汽船會社に勤務

福田　繁芳（昭二　專法）興亞精機外數社の重役を兼ねられてゐるが、今般昭和土木、報國工業の兩社の代表取締役に就任、住所は東京市大森町入新井三丁目一四三

朴　燦時（昭十三專一法）新本智亮と改姓名

牧村　貞彦（昭七　大英）朝鮮咸北城津邑、日本高周波重工業城津工場社宅四一六號に移轉

前川嘉一郎（昭六　專商）大連市若狹町七二に轉居

橋本　精二（昭十四大政）トヨタ自動車工業會社に勤務、住所は愛知縣西加茂郡猿投村越戸、前田方

福田　一郎（昭三　大經）此花區西島町三六五、大阪瓦斯會社西島工場社宅に移轉

邊　洪燦（昭十四專英）原川清と改姓名、濟美第四小學校に勤務し、北區池田町一一に轉居

堀江　哲雄（昭十三專一經）京都市上京區寺町通今出川上ル五ノ三、大歡喜寺方に轉居

前川信之助（大十四專法）旭區新森小路北二ノ七に轉居

政谷　武雄（昭八專二商）松尾橋梁會社より、滿洲松尾鐵工廠に轉勤、住所奉天市大和區十二號

松室　正雄（昭十五專一商）尼崎市東本町、大日本紡績尼崎工場社宅に轉居

松尾　實（昭十五專二商）大毎本社より同社神戸支局に轉勤、神戸市湊區都由乃町一ノ五六、藤村一太郎方止宿

溝邊　文和（昭六　大商）住居が奈良市佐紀町と地名改稱

本宮　久吉（大六　專法）淺野セメント會社より東淀川區中津濱通三、大阪石綿工業會社本店總務部長兼大阪工場長に就任

松本　四郎（昭十專二法）大阪市此花區役所に勤務、住所は大阪市西淀川町浦江本通一ノ四九

松本彦九郎（昭十五專二法）松山市姫原町三四に轉居

三浦　虎雄（昭十二專一商）峯康雄と改姓名、奈良縣吉野郡大淀町今木、峯義寛方に轉居

三木　恒男（昭十五專二法）大阪市東區京橋前之町二大阪信行社酒保部に轉居

水野　政成（昭八　大經）西宮市櫻谷町一四〇に移轉

宮　眞吉（昭八專二商）神戸市灘區高羽常磐木二三ノ三〇六に移轉

森田　義光（昭八專二經）日滿鑛業會社佐世保營業所に轉職、住所は佐世保市石坂町一四八

諸井　幸村（大十五專商）東京市杉並區清水町一五八田中修方に轉居

矢野　芳一（昭八專一商）萬年社を辭し延岡市第一東新小路に轉居

安田日出男（大十五專經）大和商事映畫部を辭し大阪ビル内理研科學映畫會社大阪出張所長に就任

安井　利一（昭十五專一商）大阪中部第二十二部隊に入營

山下　明（昭十專一商）新京特別市洪熙街六ノ二、滿映社宅に移轉

山下三郎（昭五　大法）大連市山縣通二二三、大阪商連會社大連支店に勤務

山本　正次（昭十三大法）福井縣廳社會教育課に勤務

吉田　市郎（昭七　大法）蒙古聯合自治政府總務部に勤務、住所は張家口市南觀音堂街六號

米田　政雄（昭九專二法）中部第七十三部隊白男川隊に入隊

李　鋼儀（昭十五大政）木下重明と改姓名

脇本　光男（昭十五專一商）横濱市鶴見區矢向町七九〇、五十嵐兵庫方に轉居

渡邊　博（昭九專一商）昭和十二年八月應召、十四年十月歸還特殊治療の爲東京第一陸軍病院にて加療十五年十一月退院、十二月二日附を以て召集解除となる、住所は以前の住吉區天王寺町三二四〇

渡邊　正人（昭七　大商）敦賀市厚生部長に就任、住所は同市元津内殿町

森　義光（昭八專二法）東京市麹町區丸ノ内三ノ六富士生命保險會社に轉居

山口　靜一（昭三　專商）靜岡女子商業を辭し、日本自動車飛行機タイヤ製造會社に轉勤、住所東京市目黒區目黒四ノ九八四、富平茂一郎方

八幡　保太（昭五　專法）野村銀行新町支店より神戸支店に勤務、神戸市湊區矢部町二四に轉居

矢野　芳一（昭八專一商）延岡市第一東新小路に轉居

前川硝子工場勤務

矢張　秀紀（昭八專一商）依藤と改姓、西宮市荒戎町七六に轉居

山口　靜男（昭十二專一商）浪速區貝柄町、市立惠美質業學校奉職

山本　實（昭十二專一商）岩手縣宮古町鍬ケ崎、岩手窯業會社宮古工場勤務

横井　信義（昭十二專二法）中大央學を卒業し、若松市明治町三、日本石炭會社入社

米田　兼光（昭十五大商）日立製作所多賀工場總務部勞務課勤務、住所茨城縣多賀郡多賀町諏訪下石內、石內寮

改姓名

昭十一專二商　生島　徹三　生島　祥行
昭七　專法　金一　培　金田　宅弘
昭十三大商　友國　定市　福原　定市
昭十三大法　中辻庸三郎　前田庸三郎
昭三　專文　古川　好晴　西尾總一郎
昭十四專英　邊洪　燦　原川　清
昭八專一商　矢張　秀紀　依藤　秀紀
昭十四專二法　高龍　湜　高山　龍夫
昭十二專一法　張秀　興　新谷　信興
昭四　大法　中尾　定隆　堀　定隆
昭十三專一商　藤原　寛了　內田　寛了
昭十三專一法　朴燦　時　新本　智亮
昭十二專一商　三浦　虎雄　峯　康雄
昭十五大政　李鎬　儀　木下　重明

逝去

赤木　壽男（昭八　大法）去る十月三十一日逝去、遺族は岡山縣川上郡中村布寄、赤木忠衛

加藤　武夫（昭十　大法）本年十一月七日逝去、遺族は布施市森河內五五三、加藤泰子

木村清太郎（大二　專經）本年三月十五日逝去、遺族は大阪府豐能郡箕面村西小路、木村五郎

根本大五郎（昭十四專一法）八月二十四日逝去

倉光　健二（昭七　專法）十年十一月二十四日逝去、遺族は池田市小坂前町、嗣子倉光太郎

水島信男君（昭十四專二法）去る九月二十日逝去

校友會費拂込者氏名（其の七）

昭和十五、六年度會費

田中西藏　眞鍋竹治郎　戸川　巖

昭和十五年度會費

木村　基　生次壽男　東稔賴義　西川敏春
澤井吉之助　文谷晴正　諏訪富三郎　西尾總一郎
小角太一郎　正井善藏　瀧　利幸　福田金治
賀成　清　淺沼　淳　吉本　節　山本　實
井上專一郎　片桐軍司　二川利和　井並則之
井上隆澄　岩井義雄　藤原儀行　林　利作
柿原　拓　渥美元次郎　村岡正夫　田中久夫
二川俊正　橋本壽典　清家唯一　出來島宗夫
石合善吉　春名　齊　下村監佐　佐藤嘉一郎
村尾信次　園田　豐　荒井孫四郎　阪口　清
上村信義　芝崎悅二　中井正五　池谷龜太郎
上田安久　三宅富三郎　三宅通夫　西村五男
鍵尾憂雄　柴田忠恒　高木惣次郎

雁信

佛印にて　賀屋俊雄

拜啓　佛印も昨今俄に涼しくなりました。益々御淸榮奉賀します。こちらには關大關係では德尾俊彥教授と私が居ります。折々會つては千里山の秋や天六のたそがれを語りあつて居ます。

昨日私は〇〇地へ出張した際圖らずも專門部出身の末永博君に邂逅しました。諒山、ドンダンで激戰をやつて來た計りの勇士でした。こんな土地で教へ子から『先生ではありませんか』と慕しげに呼び止められた時の悅しさ御想像下さい。小生も軍の進駐と共に公務を拜命して忙しいが元氣で活動して居りますから御安心下さい。（一五、一〇、二五）

二月に新名簿發行

昭和十六年度用校友會員名簿は、本年十二月中に發行の豫定であつたが、昨今に於ける經濟變動により多數轉業者を出し、その上住所異動等相當多く去る十一月發行の校友會誌第一號に挿入のハガキが引續き未だに寄せられる等、特に名簿の正確を期せんとする本部では例年通りの發行を差控へ、二ケ月おくらせて新春二月中旬にこれが發行をなす豫定となりました。

會員各位の御諒承をお願ひします。

昭和十六年一月

關西大學校友會

最新刊

關西大學研究論集

【第十號】

菊判各篇一五〇頁
定價各壹圓
送料十二錢

法律・政治篇

（昭和十五年十二月發行）

天皇の國法上の御地位及天皇大權の御意義　吉田一枝
國家の共同團體的性格　岩崎卯一
東亞に於ける九國條約の地位　川上敬逸
改正地方稅制について　中谷敬壽
誤想防衛と構成要件　植田重正
親子法改造論考　福島四郎
自筆證書による遺言　木村健助

經濟・商業篇

（昭和十五年十二月發行）

綿織物に於ける中小工業統制組織　磯部喜一
市開催の日時に就いての考察　瀧澤喜子雄
ハイエイク新舊景氣理論批判　中川庸太郎
ウクライナとドイツの東方政策　中村良之助
轉換社債論　三木純吉
生前相續の課稅について　三谷道麿
第十九世紀に於ける）イギリスの「帝國論」（一）　矢口孝次郎

文學・哲學篇

（昭和十五年十二月發行）

根本惡とその救濟　片山正直
平家物語の敬讓語　飯田正一
蒙古歌謠の一班　高橋盛孝
批判的英文學史　片岡甚太郎
"The Canterbury Tales" に表れた Romances　廣瀨捨三
英語々彙の內容　八島治一

甲文堂

大阪市東淀川區長柄中通　振替大阪六二五二〇番
東京市神田區錦町一ノ十一　振替東京七三八一二番

堀新一著

商業組織の再編成

菊判クロース上製函入
定價貳圓八拾錢
送料拾四錢

◇最新刊◇

本書は、自由主義的經濟より、これが批判の上に立つて如何に新しい芽が生れつゝあるかを、主として商業分野を中心に研究せんとしたものであるが時にはこの芽を如何なる方向にのばすべきかの問題にも觸れてある。蓋し商業組織の再編成と云ふことは現に進行しつゝある一つの事實であると共に、又我等の一つの要求でもある。故に我等が之を學問的に研究する場合も、この兩面からの把捉を忘れてはならない、敢て一讀を奬む

オトマアル・シュパン著
赤羽豐治郎譯
個人主義經濟學と全體主義經濟學
價五拾錢
送料六錢

ゾムバルト著
宇治伊之助譯
國民經濟學と社會學
價貳拾五錢
送料六錢

株式會社
大同書院

大阪市北區梅田新道
振替大阪三一九七二番
電話北一六七五番
一五五三番

東京駿河臺中央大學前
振替東京八三二八番
電話神田二二二八番

關西大學學報　第百八十五號（昭和十六年一月十五日發行）